

《楽曲解説》

解説=宮澤 淳一

3/6 第876回オーチャード定期演奏会
3/7 第877回サントリー定期シリーズ
3/10 第100回東京オペラシティ定期シリーズ

アダムズ(1947-) 議長は踊る

ジョン・アダムズはマサチューセッツ州ウースター生まれの作曲家である。ハーバード大学で学び、1970年代よりサンフランシスコを拠点に活動。ライリー、ライヒ、グラスらが1960年代に推し進めたミニマリズムの後継者と目される。ただしアダムズは、「ミニマリズムに飽きたミニマリスト」という異名もあるように、最小限の音型の反復とその変化のプロセスばかりを探索する人ではない。特にハーモニーへの意識が高く、反復技法を多用しつつ、美しい響きで聴衆を魅了する。

『議長は踊る』は12分程度の小品で「管弦楽のためのフォックストロット」と副題がある。フォックストロットとは、米国の芸人ハリー・フォックスが1914年に踊ったラグタイムのステップに由来して世界中に広まった軽快な4拍子の社交ダンスを指す(今日の「スロー・フォックストロット」とは別物)。

この曲は、1986年1月31日、ルーカス・フォス指揮ミルウォーキー交響楽団に

よって初演されたが、本来は歌劇『中国のニクソン』(1987年10月初演)の第3幕前半の音楽である。オペラはニクソン大統領の電撃的な72年の訪中を題材に為政者たちの苦悩を描いた作品で、当初は宴席に江青(元女優で毛沢東主席夫人)が押しかける場面でこの音楽が構想された。江青がチャイナドレス姿でフォックストロットを踊り出し、それを見て興奮した肖像画の主席が額縁から抜け出してともに踊る趣向だった(「議長」とは、ここでは「主席」を指す)。音楽は前半が踊る毛沢東を、中ほどの官能的な旋律は江青を表わし、末尾で聞こえるピアノはニクソンが弾いているのだという。

【楽器編成】フルート2(1、2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2(2番はバス・クラリネット持ち替え)、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、チューバ1、ティンパニ、ペダル付き大太鼓、シンバル、サスバンド・シンバル、シズル・シンバル、ハイハット・シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、シロフォン、ビブラフォン、アンティーク・シンバル、ベルツリー、クラベス、カスターネット、サンドペーパー・ブロック、ウッドブロック2、弦楽5部

エマーソン(1944-) (吉松 隆編) タルカス

噴火(約3分)
ストーンズ・オブ・イヤーズ(約3分)
アイコノクラスト(約2分)
ミサ聖祭(約2分)
マンティコア(約2分)
戦場(約3分)
アクアタルカス(約5分)

1960年代後半、クラシック、ジャズ、現代音楽等を取り入れて先進性を目指すプログレッシヴ・ロックというジャンルが生まれた。その代表格が1970年結成の英国の3人組ロック・バンド、エマーソン・レイク&パーマー(略称ELP)で、『タルカス』とは、そのセカンド・アルバム(1971年6月英国発売)の表題曲である。

タルカスとはELPのメンバーである作曲家キース・エマーソン(1944年生)の考えた怪物で、アルバムの表紙に描かれたその姿は、大砲を備えた装甲車風のアルマジロもどきである。音楽は、火山から出た卵から生まれたタルカスが他の怪物たちとの戦いを経て海に消えてゆくストーリーに基づく組曲で、全7曲は続けて演奏される(第2・4・6曲には歌詞あり)。

吉松隆(1953年生)はこの曲を「20世紀初頭の現代音楽と20世紀後半のロックとを繋ぐミッシング・リンク」に当たる重要な作品」と考え、「クラシック音楽界

に知らしめたい」と編曲に励んだ。2010年3月14日、藤岡幸夫指揮東京フィルハーモニー交響楽団が初演し、ライブ盤も発売。吉松が音楽を担当した2012年のNHK大河ドラマ『平清盛』でも用いられた(本日のマエストロ佐渡裕も、2011年2月20日放映の『題名のない音楽会』で東京フィルと演奏、シエナ・ウィンド・オーケストラとの吹奏楽版には2012年録音のライブ盤もある)。

第1曲「噴火」(アレグロ・モルト)はタルカス登場の場面。冒頭の和音のあと、激しい5/4拍子のリズムが続く、やがて金管楽器群が荒々しい雄叫びを上げる。**第2曲「ストーンズ・オブ・イヤーズ」**(モデラート)ではクラリネットとホルンが歌のパートを奏でる。「歳月を経た石」の上を歩いた経験のない「おまえ」に覚醒を呼びかける内容。**第3曲「アイコノクラスト(偶像破壊)」**(アレグロ・モルト)は、5/8拍子の無窮動の音楽である。ポップス風の**第4曲「ミサ聖祭」**(アレグロ)の歌詞は、宗教者の欺瞞を暴く内容。**第5曲「マンティコア」**(アレグロ・モルト)とは、人間の頭、ライオンの胴、蠍の尾を持つ怪物を指し、音楽は緊迫した9/8拍子(3拍子系)のリズムで進行する。

第6曲「戦場」(モデラート)では4/4拍子による穏やかな歌を木管と弦の楽器群が奏でる。原曲の歌詞は戦勝の犠牲を嘆き批判する内容。**第7曲「アクアタ**

ルカス(モデラートで開始)では前曲でも現われた勇壮な旋律が反復される。静まったところでテンポは速まり、第1曲の「雄叫び」の旋律が再出し、音楽はクライマックスに向かう。

[楽器編成] ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、サスペンド・シンバル、ハイハット・シンバル、トライアングル、プラス・ウインド・チャイム、アンティーク・シンバル、ウッドブロック、カウベル、タンブリン、トムトム、小太鼓、大太鼓、タムタム、マリimba、ヴィヴァフォン、チャイム、ピアノ、弦楽5部

ラフマニノフ(1873-1943)

交響的舞曲 作品45

3/10

第1楽章 ノン・アレグロ(約11分)

第2楽章 アレグロ・コン・モート(ワルツのテンポで)(約10分)

第3楽章 レント・アッサイ——アレグロ・ヴィヴァーチェ(約14分)

ヴィルトゥオーゾ・ピアニストでもあったロシア出身のセルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)は、20世紀前半にあって後期ロマン派のスタイルを貫き、ピアノ曲ばかりか、交響曲から室内楽曲、声楽曲まで、あらゆるジャンルに傑作を書き残した。ただしそのほとんどは、故国を離れる1917年より前に作られた。以後25年間の生涯で、彼は欧米でピアニストとして活躍するばかりで、新作は数曲しか発表しなかった。

交響的舞曲は、そんな彼の最後の作品である。1940年8月21日付けの指揮者ユージン・オーマンディ宛ての手紙で「先週新しい管弦楽曲を書き上げた」ことを知らせている。実際の完成は同年10月となったが、翌1941年1月3日にオーマンディ指揮フィラデルフィア管弦

楽団によって初演された。この作品は、当初は「幻想的舞曲」として構想され、各楽章には「真昼」「夕暮れ」「深夜」の名があったが、最終的に「交響的舞曲」とされ、各標題は削られた。

第1楽章 ノン・アレグロ、ハ短調、4/4拍子。A → B → Aの3部形式。連打音を背景に、ややグロテスクな旋律(主要主題)が行進曲風に現われる。続いてアルトサクスが旋律を奏でる抒情的で優美な中間部に移行する。やがて前半の行進曲が回帰するが、末尾で鐘を模倣するピアノやグロッケンシュピールやハーブの動きを背景に、交響曲第1番第1楽章の第1主題を思わせる旋律が弦楽合奏で割り込んでくる。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート(ワルツのテンポで)、ト短調、6/8拍子。緻密な構成による憂愁をたたえたワルツである。

第3楽章 レント・アッサイ——アレグロ・ヴィヴァーチェ、ロ短調——ニ短調、6/8拍子——9/8拍子。スケルツォ風の楽章で、澁刺とした音楽で始まり、や

がて気だるく甘美な曲想と入れ替わる。再び澁刺とした音楽に戻るが、「怒りの日」の主題(『パガニーニの主題による狂詩曲』でも用いられた)が少しずつ割り込んでくる。さらに『徹夜袴』の第9曲にも用いられたロシア正教の聖歌「主よ汝はあがめ讃えられる」の旋律が低弦楽器群によって力強く導入され、楽章は華やかに終わる。楽譜の最後から26小節目に「ハレルヤ」と記載があり、自筆譜の末

尾には「主よ汝に感謝する」と書かれているという。晩年のラフマニノフはこの作品を自分の最高傑作と語っていたとも言われる。なお、本作には2台ピアノ版(作品45a)も残されている。

[楽器編成] ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、アルト・サクソフォン、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、タムタム、グロッケンシュピール、チャイム、ピアノ、弦楽5部

ラフマニノフ(1873-1943)

交響曲第2番 ホ短調 作品27

3/6 3/7 3/10

第1楽章 ラルゴ - アレグロ・モデラート(約20分)

第2楽章 アレグロ・モルト(約11分)

第3楽章 アダージョ(約14分)

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ(約15分)

演奏に50分以上を要する大作である。ラフマニノフは1903年頃に着手、06年の秋から本格的に創作に励み、07年7月に別荘のあった南ロシアの避暑地イワーノフカでオーケストレーションを開始(8月に同地で次女誕生)。行き来をしていたドイツのドレスデンで08年1月に完成させた。初演は同年1月27日(新暦2月9日)にペテルブルクのマリインスキー劇場でアレクサンドル・ジローティの指揮で行なわれ、成功を収めた。

第1楽章 ラルゴ——アレグロ・モデラート、4/4拍子——2/2拍子、ホ短調。

導入部付きのソナタ形式。導入部冒頭の一連の動機は作品全体に関与する。それらの動機とは、(a)冒頭のチェロとコントラバスによる低音の重苦しい動き、(b)典礼風の木管合奏の和声進行、(c)第1ヴァイオリンの高音による抒情的な旋律(メゾフォルテ)——の3つである。これらが複雑に絡み合いながら曲想を高めたあと、独奏イングリッシュ・ホルンによる情感豊かなカデンツァを挟んでソナタ形式の呈示部が始まる(アレグロ・モデラート)。即座に第1・第2ヴァイオリンが演奏する流麗な旋律が第1主題である。これが大きな高まりを作り、静まり、クラリネットの独奏を挟んで第1ヴァイオリンが甘美な第2主題(ト長調)をゆったりと歌う(モデラート)。やはり音楽は高揚し、夢見心地が続く、短調に戻るところまでが呈示部である(本公演では反復は省略される)。

オーチャード 3/6

サントリー 3/7

オペラシティ 3/10

展開部は、ファゴットとホルンの刻むリズムを背景に独奏ヴァイオリンが序奏部の(c)の動機を歌うところからで、(a)(b)の動機も加わり、起伏に富んだ劇的な音楽が繰り広げられる。クライマックスを経て、木管楽器群が愛らしい和声進行をゆっくりと響かせる場面からが再現部である(モデラート)。弦楽器群主導で第2主題が歌い上げられたあと、急にテンポが上がり(ピウ・モッコ)、(c)の動機が再び前景化し、嵐のような激烈なコードで楽章は不意に終わる。

第2楽章 アレグロ・モルト、2/2拍子、イ短調。3部形式のスケルツォ楽章であり、ホルンの高らかな合図を承けて第1ヴァイオリンが軽妙な主題を奏で、音楽は勢よく流れ出す。やがて流れが止まり、独奏クラリネットの旋律が新しい合図となって、第1・第2ヴァイオリンが抒情性的かつ勇壮な旋律を歌う(中間部のモデラート)。その後、前半部が再現されて終わる。

第3楽章 アダージョ、4/4拍子、イ長調。冒頭から第1ヴァイオリンによって甘美な旋律が奏でられる(エリック・カルメンの1974年のヒット曲「恋にノータッチ(Never Gonna Fall in Love Again)」や、最近の缶コーヒーのテレビCMでも有名)。独奏クラリネットの牧歌的な旋律がこれに続き、ロマンティックな情感を

盛り上げていく。途中、第1楽章の(c)の動機が弦楽合奏に現われ、曲想に厳しさを加える。音楽が最高潮に達すると、休止をはさみ、楽章前半の素材がさまざまな楽器で静かに再現され、甘美で切ない音楽は繊細さを増していく……。

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ、2/2拍子、ホ長調。ゆるやかなソナタ形式。跳ねるような前奏で始まり、オーケストラ全体が喜びに満ちた旋律(第1主題)を呈示する。おとなしい行進曲風の推移部を経てこの主題は華々しく再呈示され、続いて管楽器群の三連符の伴奏に乗って、弦楽器群がユニゾンで優美な旋律(第2主題)を情感豊かに歌う。曲想が静まると第1ヴァイオリンが第3楽章冒頭の主題をゆったりと奏でるが(アダージョ)、すぐに速いテンポに戻り、緊迫した曲想の中で独奏フルートによって第1楽章の(c)の動機が聞こえてくる。「運命の動機」(「タタタターン」)なども新たに加わり、さまざまな意匠が凝らされる。やがて第1主題が、続いて第2主題がそれぞれ長大に再現され、クライマックスを迎え、全曲は高らかに終わる。

[楽器編成] フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ3(3番はイングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、グロッケンシュピール、弦楽5部

みやざわ・じゅんいち／青山学院大学総合文化政策学部教授。音楽批評・文学研究・メディア論。著書に『グレン・グールド論』(春秋社・吉田秀和賞)、『マクラーハンの光景』(みすず書房)、訳書に『リヒテルは語る』(ちくま学芸文庫)、『改訂新版 音楽の文章術』(共訳、春秋社)など。